武蔵野日曜集会

ロゴス
――ヨハネ伝第1章1節――

１９６７年６月４日（武蔵野）
小池辰雄

霊の福音書　ロゴス　きたりて見よ　霊身　霊言　初めに行為あり　気　命の根源の霊言　神の霊を呼吸する　早く落第生になった方がいい　悪霊との戦い　私たちがキリストの言となる　我々は即ち天国体

【ヨハネ1・1】
1 太初（はじめ）に言（ことば）あり、言（ことば）は神と偕（とも）にあり、言（ことば）は神なりき。

●霊の福音書

私はかつて南江堂から『イエスの実存』という教科書を、福音書の抜粋を編んで出版しました。学校でテキストにこれを今でも使っておりますが、今度はヨハネ伝の抜粋を編纂することになり、今楽しみにしています。そこに書いてあることは塚本先生の『福音書異動一覧』という素晴らしい共観福音書の本を参考にいたしました。「共観福音書」というのは見方が同じだというわけで、マタイ、マルコ、ルカが共通であるという。マルコ伝が大体、基本であるというのが定説のようです。この三つの福音書に共通な資料が「M」といわれ、マルコ伝に特別な資料が「S」、それからマタイの特別な資料、そして「Q」で表わされるところのイエスの説話の資料というものがある。それからもうひとつ「G」という、物語の言い伝えというのがある。ルカ伝は、やはりこの共通なものとルカに特別なものと、それにこういう物語というものがありまして、大体、そんな資料になっているというのですが、ヨハネ伝だけは全然別個のものであるという。しかしながら、最近、ヨハネ伝を交えて四つの――ヨハネ伝ももちろん三つのものと共通のものがありますので――そういう共観福音書の素晴らしい本が出ている。

ヨハネ伝の一番先に出てくるところの、今日やる第1節から18節までがその序説になるわけですが、ここのところに当たるようなものが三つの資料の中にはないわけです。非常に書き方が特別な出方になっている。

福音書を見た私の感じでは、マタイ伝は非常に言葉が整っている。マルコ伝はキリストの行為面が非常に端的に書かれている。ルカ伝は心の面が非常に豊かに描かれて、一番文学的なものです。言、行、心となって、ヨハネ伝は何かというと、非常に霊的な福音書で

あります。ヨハネ伝というのは時代的にも一番後に出来上がったらしい。２世紀頃の人で、アレキサンドリアのクレメンスというのが「霊の福音書」ということを言っている。そういう先輩が既にそのことは洞察しております。まぁ少し注意して読めば、誰でも感ずるところですが。私たちはこのヨハネ伝をこれからじっくり学びたいと思うわけです。この頃の註解で一番注目すべきものはブルトマンのヨハネ福音書の本ですが、ドイツ語が読める方はどうぞお読みください。実に素晴らしい本です。

●ロゴス

今日は第１節の「ロゴス」ということで、

「**太初（はじめ）に言（ことば）あり**」

というこの「言」です。この第１節だけ学びたいと思います。ギリシア語では、

「**エン　アルケー　エーン　ホ　ロゴス**」

「**初めにロゴスがあった**」

という。ドイツ語に訳すと、「デア　ロゴス」といって、「ロゴス」は男性名詞でおもしろいわけです。ドイツ語で「ヴォルツ」（言葉）というと「ダス　ヴォルツ」となって中性名詞になるけれども、「ロゴス」をそのまま使うと、「デア　ロゴス」と男性で訳すわけです。

「**カイ　ホ　ロゴス　エーン　プロス　トン　テオン**」

「**ロゴスは神と偕に在った**」

「プロス」という前置詞はいろいろな使い方がありますが、「神に対面して」と、これは四格ですから、本来は対面するような気持がある。けれども、四格でもやはり、「共に」「バイ」というような三格的な意味のときもあるので、バイエルの字引をみるとやはり三格的にとっている。「神のもとにある」とか、「あの人は叔父（おじ）さんの所にある」というときには、やはり「バイ」というのを使います。叔父さんの所に宿っている。そういった気持で、「のもとにある」という日本語の「もとに」という字が大変気持が出てくるのではないかと思う。「ともに」というよりも「もとに」といった方が何かこの場合、意味合いが深くとれるように思います。

「**カイ　テオス　エーン　ホ　ロゴス**」

「**またロゴスは神であった**」

という、この第１節です。ほとんど詩的な文句であります。

「ロゴス」という言葉はアレキサンドリアのユダヤの哲学者のフィローが非常に展開した言葉で、フィローという哲学者が使った「ロゴス」の意味はもっと「理性的な法則」のような気持が強いわけです。あるいは、「宇宙的な法則」ということ。これはストアあるいはヘラクレートスあたりからきています。そういったような意味を持っている言葉でありますけれども、ヨハネはもちろん、この言葉をかりて完全に福音的にこれを使っているわけ

です。

言葉というのはその時その時に、時代または人によっていろいろニュアンスが違ってきますので、同じ言葉を読みながら、その時の現場というものを、背景というものを、個人的な人というものを、よく知らないとつかめない。そういう意味において歴史的な研究というものがまた一面非常に大切でもあるわけです。

「**太初（はじめ）に言（ことば）あり**」

というこの「はじめに」というのは、すぐあなた方がお気づきのように創世記がまた、

「**元始（はじめ）に神天地を創造（つくり）たまえり**」（**創世記1・1**）

とある。これはおそらくヨハネもそこから、創世記第1章1節と相呼応した気持で「はじめに」ときたんだろうと思います。あれも「ベレシーツ」といって、一番先に「はじめに」という言葉が出てくるわけです。

「**はじめに神は創造した、天と地とを**」

という言い方です。ヨハネは、

「**はじめにロゴスがあった**」

と言う。

●きたりて見よ

キリストは自ら、

「**我は始めなり、終りなり。アルファにしてオメガなり**」

という言葉を発しておられる。始めがあれば必ず終りありという。「終り」というのは、すぐおしまいというのではなくて、最後の目的がある。大原因、大元始。原因と目的。非常に神さまの世界は、歴史は目的論的である。ただ成るがままに任せているというのではなくて、目的を持っている。目的を持っているということは、その神という方が意志的な存在である。聖意、「汝の御意を」という聖意です。聖なる意志を持っておられる実在者です。

まぁこんなことを言いましても、今の若い人たちは、

「一体、聖なる意志を持っている実在者なんてものはあるのか？」

というようなわけで、すぐくってかかってくる。今の若い人に福音の世界を伝えるのは実に苦労をしてしまう。いくら説明したってダメなんだ。これは説明ではどうにもならない。

「**きたりて見よ**」

ということ。どこに「きたりて見よ」か。これはこの福音書に描かれ、伝えられているところのこのキリストという人、イエスという人にきたりて見よと。イエスという人にきたりて見なければ、神のことはどうにもならん。どんなに説明したってダメなんです。いくら説明してもご苦労さんなはなしです。ただ「見よ」という。知らんぞと。

「ただキリストを見なさい」

と。こういうわけです。読みなさいではない。読んでわかるのではなくて、

「福音書を見ろ」

という。私はむしろそう言いたい。「読め」なんていうよりか、

「取りて読め」

という言葉もあるけれども、

「きたりて見よ」

というあのヨハネ伝４章でサマリヤの女がキリストに井戸端ででっくわして、そして驚いたでしょ。自分が水を汲むその目的もどこかへ行ってしまって、

「さぁ、みんな来て見てごらん」

と。あの「きたりて見よ」というのが一番いい。きたりて見ないことには始まらない。もの凄いドラマだから、そのドラマの中に入って見ろということです。外から見たって、これもダメなんです。その中に入って、つらつらとそこに見なくてはいかん。

●霊身

そういった意味において、一番行動的な福音書はマルコ伝です。非常に劇的に彫刻されている。マタイ伝は言葉を詩的に表現し、ルカ伝は心情のイエスを絵画的に描写し、ヨハネ伝は神霊のイエスを音楽的に伝えている、と私は見るわけです。もちろん、キリストの現象している面がそれぞれの福音書で、行的であり、言的であり、心的であるということですが。しかし、これは単なる行ではない。これは霊に裏付けられた行（霊行）であり、この言も霊に裏付けられた言（霊言）であり、この心も霊に根拠をもった心（霊心）である。すると、ヨハネ伝のところは霊霊となるが、さぁ、誰かここに答案を書いてください。このつながりがどうなるか。私は今度はこれを逆にひっくり返して、「霊身」と書く。これは今日初めて書く。第1章14節のところに、

「言は肉となった」

と書いてある。言は肉となったという、ヨハネ伝は霊的な書だというけれども、何か空漠たる霊ではないですよ。この霊は実に身を持った霊である。化身したところの霊である。霊の化身した事態。だから、一番本質、本ものそのもの、ずばりそのものを表わしているのが実はヨハネ伝なんです。キリストそのものを。パウロが

「もはや肉において知るまじと思う」

と言った。また、

「受肉した霊を信じない者はまことの信仰ではない」

とヨハネ書簡の方に書いてある。そういうわけで、霊身そのものたるイエス。このイエスに私たちがとっくんで、その中に自分を突入させることがヨハネ伝を私たちが学ぶという事態であって、単なる意味ではありません。

そういうわけで、このヨハネ福音書を学びおわったときに、皆さんはどういうことになるか。私は期して待つべしと思っている。そのかわり、ただ安閑としてその世界に入れるわけではない。そういうのが、私たちが今立ち向かおうとするところのヨハネ伝という、ヨハネによる喜びの音信という、この本であります。

●霊言

「初めに言(ことば)あり」

という。「ことば」というのは万葉集の中にある。大言海にも出ているわけですが、「ことば」というのは日本語では、「言葉」「言端」と書く。「葉」の字を書くのは、「ことば」というのは非常に豊かなもので、さかえにさかえて葉を繁らせるような事態であるというので、それで「言葉」ということになったそうです。「端」の方は、口から出たところの、意味あるところの何ものかであるという、口から派生して出てきたという、そういう気持で「端」という字を書くようになったことが書いてある。だから、「ことのは」とか「くちのは」ともいう。「こと」はまた「事(こと)」にも通ずる。言と事がまた相通ずるものである。これはヘブライ語もそうです。「ダーバール」という字が「言」でもあり「事」でもある。

それから、「ことだま」という言葉がある。「言霊(ことだま)」と書く。

「日本(ヤマト)ノ国ハ、皇神(スメガミ)ノ、厳(イツク)シキ国、言霊(コトダマ)ノ幸(サキ)ハフ国ト、語リ継ギ、言ヒ継(ツガ)ヒケリ、云々。
敷島ノ、日本ノ国ハ、事霊(コトタマ)（言霊）ノ、佐(タス)クル国ゾ、真福(マサキ)クアリコソ」

という。それは言葉がただうわついた言葉でなくして、魂と関わりがあるということから、「ことだま」という。いい言葉ですね、「言霊」とは。これをひっくり返して「霊言」と書く。「初めに言あり」というのは、それは「言」でいいですけれども、もし当てるならば、

「初めに霊言あり」

と、私は「ロゴス」を「霊言」と当てたいのであります。ところが、明治初年の日本語の聖書の中に、

「初めに霊言ござる」

という訳があった。私はそれを見て、非常に楽しかった。その意味はとにかく、「霊言」といわざるを得ないところの事態であるということをこれから見ていこうというわけです。

●初めに行為あり

まぁちょっとその前に少し散歩をすれば、ゲーテが『ファウスト』の中で、第一部の1224行に、

「聖書には『初めに言がある』と書いてある。即ち、自分はこのヨハネ伝の最初を訳そうと思うが、「ヴォルツ」という言葉を聞いて、もうここで私はすぐ躓いてしまった。誰が自分をこの翻訳で助けてくれるか。この「ヴォルツ」という言葉をそんなに高く評価するわけにいかないので、何か別な翻訳をせざるを得ない。私がもし霊によって

照らされたならば、「ロゴス」という言葉は「ジン（意）」と訳したい。お前さんのペンがあまり急がないように、最初の行をよく熟考しなさい。ちょっと待てよ。一体、一切のことに働きかけまたそれをつくるものは、作用するところのものは一体、意であろうか。『最初にクラフト（力）があった』とあるべきではないか。けれども、私はこう書いているうちに、私がクラフトという翻訳でそれでいい気になってとどまっているわけにはいかないように何者かが私に警告を発する。また私を霊が助けくれた。忽然として私はその忠言をみる。安心して今や書く。『初めにタート（行為）あり』と。」

「初めに行為あり」と書いて、自分はやっと気がおさまったという。さすがにゲーテはおもしろい。即ち、意、力、行と。ゲーテも、

「人生の最後の目的はヴォールタートである」

と言っている。人に対する「好意ある行為」であると。これはゲーテの『ファウスト』および『ヴィルヘルムマイスター』の基礎にある気持です。

「汝、生活において何ごとをも延期するな」

という。明日があるからといって、今日はこれくらいにしておこうなんていうのはダメだ。今日一日を全的に生きろという。ゲーテでもダンテでもとにかく本当に生きた人はみなそうです。内村鑑三先生がそうです。「一日一生」という。今日一日を――本日一生でもいい――一生として生きろと。

「朝に道をきかなば夕に死すとも可なり」

というわけだ。要するに、

「人生は質である。量ではない」

という。だから、何も制限してはいかん。

「明日、明日、明日がある、今日ばっかりではないと、怠け者は言う」

というドイツ語の諺がある。

「汝の生活は行為また行為であれよ。行為にまた畳みかけてまた行為であれよ」

という。しかしながら、その行為がいわゆる行為というものになにか執着したら、本当の行為ではない。それはやっぱり、老子の

「無為の為」

というのが素晴らしい。何もしないところの本当の行為がある。老子が「無為の為」と言った。東洋人はそういうところが素晴らしい。「タート　オーネ　タート」ということ。タート（行為）のないタートが本当のタートだと。無義の義、無信の信という。まぁそれはそれとして、とにかく、大いに行動でなくてはいかんということです。

●気

当時の、ゲーテの頃のキリスト教がやっぱり、言葉の解釈だの、言葉のお説教だの、そ

ういうキリスト教だったから、もうあきあきしているわけだよ、そんなものは。何も言わなくていいから、もっと実に現せという気持がこのファウストをして翻訳させている「タート」「行為」という言葉に表れている。これは「ジン」（意）であり、「クラフト」（力）であり、「タート」（行）であるんです。これが全部ひっくるめている。神の意、聖意――

「汝の意志を成らせたまえ」

というこの意志――神の意志は力を持っている。それが発しては言葉となり、発しては行為となる。言葉と発するときには、一体どうするんですか。意志が出なければ言葉にならないでしょ。

だから、意と言の中間には気があるわけです。この「気」という字は「風」でもある。「霊」でもある。これは「霊」「ルーアッハ」「プニューマ」という字です。神の気であり、元の気、元気である。「元気を出せ」というのは、本当は素晴らしい言葉だね。神さまの気でもって動けという。

「万（よろず）のものは神の口より出る息によって成った」

というような言葉が詩篇33篇にある。ヨブ記の30～32章のエリフの言っている言葉の中にも書いてある。「気」即ち「ガイスト」「プニューマ」です。そういう気が出なければ「プニューマ」なくして言葉というものも出ない。

私たちが言葉を発するときには必ず息が出ている。息がでなければ何も言えない。必ず気が伴っている。実に気こそその言葉を動かしているところの原動力である。その気は霊です。霊が発しているところの現象面、霊の現象面がこの気であり、この言葉である。だから、霊の現象面の奥には静かな気というものがこもっていなくてはいかん。気が、霊が内住していなければ、本当の言葉は発せない。そうでないような言葉はみんな浮いた言葉だ。一番深い元気ということ。パウロがコリント後書4章17節で、

「主は即ち御霊なり」

と言っているでしょ。キリストがヨハネ伝4章でサマリヤの女に、

「父は霊なれば」

と言う。父神は霊神である。キリストも霊である。この霊が共通項です。三位（さんみ）一体というのは結局これのことです。聖霊です。神とキリストと御霊はなぜ三位一体であるかというと、みな共通の霊であるからです。だから、存在の一番奥のところは霊である。

●命の根源の霊言

こないだハイゼンベルクが京都で講演をした。私は物理のことはよく知らないけれども、一番極限は中性子とか電子とかいうものらしい。これに力を与えると最後のところはこれが破れてしかも同じものが出てくるという。破れれば小さいかと思うがそうじゃない。破れて同じものが出てくるというようなことが書いてあったよ。力を与えると、最後に同じ

ものがまた出てくる。これはどういうことか。私は素人的直感でこう思う。これは力を加えたのだから、同じものが出てきたというのだから、やはりここに同じ力的なものが、最後は物質とはいえない、何かエネルギー的な何ものかである。だから、

「初めに力あり」

なんてゲーテが言ったけれども、これは当たっている。

最後のところは、何だか知らんけれども、生命というもの。とにかく、聖書は、その最後的なもの、始めにして終り的なものの実体はやはり霊というよりかしょうがないらしい。万象はこの霊の力によって成ったから、何か霊的なもの、何か力あるもの、そういうようなことでなかったら、ものは生きていない。これだって死んでいるようだが、実はある程度生きている。よろずのものは生きている。そういうようなことで、大変おもしろい。

言葉というものは正に気から、気がなくしては言葉はないというところに、

「初めに霊言あり」

と私がどうしても訳したくなるゆえんがあるわけです。霊と言は離してはいかん。ところが、今のキリスト教が一般にどうも、ことにプロテスタントが「み言（ことば）、み言」といって、言葉の解釈ばっかりえらく繊細になっている。悪くはないけれども。もっと根源的な把握が大事なんだ。

「エグゼゲーゼ」という「解釈学」の「解釈」という言葉は「引っ張り出す」という字です。私は、意味あいを「引っ張りだす」ということよりも、本当の聖書の意味をつかむのは、「押し出し」だと思う。中から押し出すようなつかみ方をしなければ、聖書の言葉はわからない。外から引っ張りだすのではなくて、中から押し出して、「こういうことだよ」と。キリストは、「私の言葉をよくわかれ」とはおっしゃらない。

「我が言葉をくらえ、飲め」

と言われた。「食べ、飲め」と。

「そのものずばりを受けとれ」

ということです。

「水はH_2Oであるということがいくら分かったって、渇きはなおらない。水は飲まなくてはダメだよ」

というのと同じことです。そういうわけで、

「初めに言あり」

という、この言葉自身を聞いていると、皆さん、「初めに言あり」なんて言われたってピンとこないでしょう。ところが、

「初めに霊言ござる」

という式の、何か生き生きとしたところの、生命の根源となるところの霊言というものがある。

●神の霊を呼吸する

そうなってくると、ヨハネはこれにおいて何を言わんと欲しているかは、すぐあとから出てくるわけです。この「言」とは何かと。これをまた「光」ともいう。ついにそれは地上に現われて、「肉」となった。

「我々の間に幕屋を張った」

という言い方をしている。即ち、人となった。言が人となる。この霊が化体して、霊身として現われた。その霊身たるキリストを今、導きだそうとして、

「初めに言あり、言は神のもとに在って」

あるいは、「神の懐の中に在る」。これは「懐の中に在る」という言葉がこのヨハネ伝の少し先にあるでしょ。

「この独り子は神の懐にいて、その栄光を表わした」

という。この「懐」というのは大変いい言葉だ。日本人にはよくわかる。だから、2節目も、

「初めに言があった。言は神と偕に、神のもとに、神の懐に在った」

と。内接していた。そして、内接しているからこれは神であったと。神と同質であった。あの例の有名なアタナシウスとアリウスとの戦いで、アリウスは

「キリストは神と類似（ホモイウジオス）な性である」

と言う。アタナシウスは

「いや、キリストは神と同質（ホモウジオス）である」

と言う。言は神と同質である。正にヨハネ伝はそうなんです。「言は神であった」ということは、「ゴットハイト」（神性）をもっていた、実に「ゴットハイト」そのものであった。「神質」であった。

この第1章1節はなんと素晴らしい宣言ではないか。この言によって一切のものが造られてきたというわけでありまして、神は私たちにとっては端倪すべからざるところのものですよ。神さまは望遠鏡にも顕微鏡の下にも出てこやしない。対象化してつかまえようとしたって、それはダメですよ。神さまは、つかまれるまではわからない。こっちからつかむのではない。つかまれなければ。

あなた方は空気をつかめますか。つかもうとしたって、空気はつかめない。私たちは空気につかまれて、空気にすっかり包まれて、空気を吸い込んで、そして私たちはこうやって生きている。けれども、空気は見えない。見えないけれども、呼吸して生きているという事実が、何ものよりも空気は実在するということを証明しているわけです。

「あるか、ないか」

ではない。大事なのは事実です。私たちは空気を吸って生きている。寝ていても覚めていても空気を吸っている。完全に空気の懐の中にある。

我々は霊的存在として神の霊的なこの事態の中に実は置かれている。信ずるも信じない

ありはしない。そのことに気がつかなくては。気がつくわけです、「信ずる」なんていっても。「信ずる」なんてえらそうなことを言うからいかん。気がつけばいい。

「ああ、私は、何かしらんけれども、素晴らしい霊的実在につかまれて包まれていました」

と。そのことがわかったときに豁然として心が、魂が自由になる。

「御霊のあるところに自由あり」

とパウロが言ったのがそのことなんです。どんなによさそうにみえても、これにつかまれなければ、この神の霊を呼吸するまでは、これを内住させるまでは、聖霊のバプテスマを受けるまでは、何かみな欠けている。どこか欠けてます。そして何か本当の生命をもっていない。「信仰、信仰」なんて言ってたって、どうもそれは霊が欠けている。私がかつて永いことそうであった。

●早く落第生になった方がいい

ところが、口から空気を吸う。私たちが神の気を、キリストの気を、聖霊を吸う、受けとるという事態は何か。祈りであります。祈らざるところに御霊はこない。祈りとは自分を投げ捨てること。キリストの懐の中に投げ捨てる。だから、こないだ私は第６号（曠愛新書『キリスト道』１９６７年４月刊）にも書いたでしょ。

「からだで祈るんだぞ。ただ口先の祈りではありません」

と。からだそのものがキリストの中に投げ込められる。それが本当の祈りの態勢である。身を投げ込む。イエス・キリストの中に私たちは恐れなく十字架を通って入る。十字架を通らないで、横っちょから入ったって、それはダメですよ。それはへんてこな神秘主義になる。

私たちのこの自我という罪は完全に十字架されてある。事実をもってキリストが、十字架の事実をもって、

「お前はもはや無罪放免である。お前の自我はすっ飛ばしたから、あいかわらずダメであったって、そんなことは心配いらん」

と仰ってくださる。ところが、

「それでもまだ私は……」

なんてしょっちゅうやっているんだよ。どうしてそういうことを言うか。いつになったら、「はい、今度は、ようございます」なんて言えるんですかと。私は落第生だからもう直ちに受けとる。はやく落第生になった方がいい。あなた方は及第しようなんて思うからいかん。人生は早く落第生になった方がいい。

私は今、独協大学で留年生ばかりを集めたクラスをつくって、それを相手にしてやっている。「君たちは本当によかった」と（笑）。私は正直、高等学校のときに留年したんだから。

まぁそれは病気での留年ですけれども――学問で留年したっていい――そして、内村鑑三先生というものにぶつかったから、私はそこですっといくよりもはるかによかった。内村鑑三先生にぶつかって、マイナス一年をプラス何年にしたかわからない。だから、人生はすべて体験の仕方ひとつです。それをいかに受けとるかということひとつ。どんなに失望落胆なことがありましても、決してそれでへこたれてはいかんですよ。入学がうまくいかない、就職がうまくいかない、結婚も失恋した、なんていろんなのがある。何があったっていい。それぞれの体験をとおして、この十字架という絶対無条件の門を通ってキリストの懐の中に入ることが祈りであります。そうしたら、聖霊は来たらざるをえない。御霊のバプテスマを受けざるをえない。十字架というならば、罪から解放されているとなったんだから、この無が即無限無量となる。

「御霊を与えて限りなければなり」

と、ヨハネ伝のもう少し先にいくと書いてある。

「無量の世界にお前たちを入れてやるから。これを受けないでただ十字架だけではだめだよ」

と。だから、その先へ入ったならば、聖霊がくだってくる。

イエス・キリストがヨルダンで洗礼のヨハネから水のバプテスマを受けたときもそうでしょ。キリストの誕生はみな御霊と関係がある。マリアに聖霊が臨んだ。イエスは洗礼のヨハネによって水の中に浸ったが、彼は罪びとではないけれども、私たちの罪を背負って悔い改めを自ら受けとられた。悔い改める必要のないひとが悔い改めを受けとって、徹底的に神の前に自分を何ものともしないで、無とした。

「我何ごとも為しあたわず。なんぞ我を善きと言うか。神さまのほかに善きものはない。我何ごとも教えることができない。みな神さまがさせているだけのはなしだ」

というのがキリストの自覚であった。それは完全にキリストは自分をゼロにして、

「わが意志にあらず、汝の御意を成させたまえ」

と言って、汝の意志を百％にしたわけです。無限大に。だから、もうそうやって神の懐の中に自分を投げ出したら、聖霊が充満してきたから、神さまは

「われ汝を悦ぶ」

と言われた。私たちを、神さまがうれしいと仰るときは、自分が何ものかになったからではない。受けとるものを本当に受けとったから、「ああ、よし」と言われた。

青年諸君は、

「せっかくこれだけの才能があったり力があるのに、持っているものをみんな捨てろと言われたって、それは無理なはなしだ」

と思う。捨てるところがわるいから、そんなことを言う。みんなキリストの中に捨てたら

いい。神さまの中に。そうしたら、その捨てたものを何倍かにして活かしたもうんです。もの凄いものにして活かしたもう。これが即ち、全く聖霊の御霊の事態です。それなくして何の信仰ぞやとハッキリ申し上げる。

ヒルティが『眠られぬ夜のために』第2巻の「1月16日」のところに、

「我々自身からは何も起きない。本当の力もなければ、持続するところの事態もそこから起きてこない。ただ我々の中にある神の霊のみが一切をなしていく。そして、これのみが本当に生活の力を与えるものである」

ということを言っています。

「神の霊はもの凄いものであって、人間のいわゆる思想なんてものはどんな素晴らしい思想でも、神さまはひとたび息を吹きかければ、みんなそれは風で破れた蜘蛛の巣のようにダメになってしまう」

というようなことを言っているところがある。なかなかおもしろいことを言っている。

●悪霊との戦い

「ビベーレ　エスト　ミニターレ」（生くるは即ち戦うことなり）

というラテン語の言葉がある。それから、エペソ書6章10節に、

「10 **終に言わん、汝ら主に在りて其の大能の勢威に頼りて強かれ。**

「大能の勢威に頼りて」というのは、いうまでもなく聖霊がなかったら、「大能の勢威」なんていくら言ったって空念仏ですよ。

11 **悪魔の術に向いて立ち得んために、神の武具をもて鎧うべし。12 我らは血肉と戦うにあらず、政治・権威、この世の暗黒を掌どるもの、天の処にある悪の霊と戦うなり。**」（エペソ6・10～12）

とある。いいですか、さっきマルコ伝は行為の福音書であると言ったが、キリストがマルコ伝で行った行為中の行為は悪霊との戦いなんです。

「悪鬼を追い出せば、汝らのうちに神の国が来たと受けとれ」

と言われたでしょ。この悪鬼との戦いをやって、悪鬼を追い出して病人を癒してみたりした。

「その当時はわからないから、悪鬼なんて言ったんだ」

なんてなことを言うやつがあるけれども、とんでもない。そういう霊的な実在のことを知らないものだから。

「昔の人はわからないから、心理的にそう思った」

なんて。逆にいえば、今の人は霊のことがわからないものだから、心理的にそう思っているだけのはなしなんだ。

キリストは悪魔と戦って、サタンと一騎討ちをなさったでしょ。エゼキエルなんていう預言者も非常に霊的に高次な預言者です。もう預言者はみんなそうです。「預言者、預言者」

というけれども、預言者からヤーヴェーの霊を除けてしまったら預言者なんてものはありはしない。

「エホバかく言い給う」

なんて、想像して言っているのではないですから。みんな霊において言葉を本当に受けとっている。御霊の事態です。「御霊」という言葉はもちろん、特別にキリストの霊ということで区別しなければなりませんけれども。

マルコ伝の行というのはそういう、霊的な戦いの行が一番力強く出ているところです。そして、キリストがみんな弱い者を助けている。だから、ここでパウロも

「悪の霊と戦う」

と言っている。私たちは、

「悪霊なんていうのはどんなやつか」

なんていって、妙な探索をしなくたっていい。私なんかはおよそそういう感覚の鈍いやつだけれども。何かそういうような事態に当った時に、「主さま、キリストよ」と、「南無阿弥陀仏」「南無妙法蓮華経」のごとく、主の御名を呼べば――マルチン・ルターが言ったとおり、

「小さき『キリスト』という言葉が、『十字架』という言葉がサタンを倒す」

というのは、ルターはそれを体験したからああいうことを言っている――そういう、なにも相手はわからないけれども、主によりたのめば、主は適当にそれを処分してくださる。いつか、呪われている人を私はキリストに祈ってあげて助けたことがある。ある人が呪われて「痛い、痛い」と言い出した。それは向う（呪っている方）がぶっ倒れてしまう。だから、皆さん、ひとつもこわいことはない。ただ、空念仏ではいかんですよ。本当に自分を投げ捨ててキリストに行かなくては。

「13この故に神の武具を執れ、汝ら悪しき日に遭いて仇に立ちむかい、凡ての事を成就して立ち得んためなり。14汝ら立つに誠を帯として腰に結び、義を胸当として胸に当て、15平安の福音の備を靴として足に穿け。16この他なお信仰の盾を執れ、之をもて悪しき者の凡ての火矢を消すことを得ん。17また救の冑および御霊の剣、すなわち神の言を執れ。」（エペソ６・13～17）

と書いてある。いいですか。極めて注目に価する言葉です。

「御霊の剣、すなわち神の言を執れ」

と。レンブラントやなんかがパウロを描いているときに、パウロはよく剣を持っている。パウロのやつは剣を持っていたかなんて思うと、そうじゃない。彼は聖霊の器だから、このパウロの言葉をつかまえて、彼は剣を持っている。あれは聖霊の徴ですよ。「御霊の剣、すなわち神の言」という。即ち、御霊と神の言とは、霊と言とがここでは離すことができない同義語に使われている非常に著しいところのひとつです。

日蓮でも、もう高僧たちはみなそうです。「南無妙法蓮華経！」と言えば、龍の口で斬ろ

うとした人がぶっ倒れてしまう。これは「御霊の剣」です。「御霊の剣」は同時に「神の言」といわれると同じ事態があの日蓮において仏の世界で現じているわけです。

私たちキリストの生命を、御霊をいただく者が弱虫であったらダメです。内村先生が

「キリスト教は英雄的な宗教である」

と言われた意味はそういうところにある。何も英雄主義を言っているのではない。私たちは何ものでもない。けれども、何ものでもないものを通して神さまはいわゆる何ものかよりもはるかに強いことを為したもう。

「御霊の剣すなわち神の言」

の「神の言」というのは、もはや「意味」ということではない。言葉の意味、解釈ということばっかり気になったらダメですよ。

「わが言は霊なり、生命なり」

とキリストは言われた。それは言が私たちの中に化体（かたい）します。

●私たちがキリストの言となる

私たちは最後に、この第一句をどうとらなくてはならないか。

「太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき」

という、その「言」は、言身であり霊身であるところのキリストをこの「言」と今、言っているでしょ。

「キリストはそうだったかもしれないけれども、私たちはそうじゃない」

なんてなことでは信仰はダメです。私たち自身が今度はキリストの言となる。私たち自身がキリストの言とならないうちは、本当にこのヨハネ伝第1章1節を受けとっていることではない。ヨハネ伝はキリストそのものずばりというものを、もの凄いキリストを与える。キリストの行為でもなければ、言葉でもなければ、心でもない。全キリストそのものをヨハネ伝は私たちに今、与えようとしているんですよ。だから、そのキリストそのものの中に自分たちが飛び込まないで、どうしてヨハネ伝が読めるか。

私たち自身が本当にキリストの言となる。私たち自身が、言うことがそのキリストの言の告白となっていく。解釈ではない。告白となっていく。祈りそのものとなり、告白そのものとなってきたときに――即ち、キリストの表現体です――キリストの表現体となってきたら、もはやその言というのは単に口から発せられる言葉ではない。それはいわゆる言葉でもあり、いわゆる行為でもあり、いわゆる心でもある。心・言・行というものが渾然として自由自在に表れる事態となる。私たちがキリストの言となり、霊の息吹となり、絶言の言となる。いわゆる言に絶したところの言となる。そうなったときに、ヨハネ伝1章1節はもう何ともいえなく力となります。私たちは、

「即身即主」

となる。この身このまま主に即する。こんな言葉を言うと、すぐ神秘主義かと思われるが、そうじゃない。この身このままはどこまでも罪びとに過ぎませんよ、この身は。この罪びとが主に即するとはいかにして可能であるか。

「十字架・復活のキリストを御霊において受けとる」

ということにおいて。「即身即主」というこの「即」の字のところにはちゃんと十字架が立っている。この十字架が立って、御霊によっていただいて、その中に即として同質にされていくことが「即」なんです。同質です。御霊を宿さなくては。その同質性はどれだけであるかは、そんなことは知らんですよ。御霊はいただいているんだから。とにかく化されつつあるが、なにか「自分が同質になった」なんて、そんなことではない。同質とさせられている事態は絶対恩寵の事態で、何ものでもない。

●我々は即ち天国体

終末的現実というものをもって、我々は即ち天国体である。そして相共にたずさえて行こうではないかと。人に何と言われてもいい。みんなその世界に同化させていこうではないかという。戦いがもはや戦いでなくなってくる。今度は、戦いがなぜ勝利であるかというと、ものを化していく。同化していくところの力を持っているわけだ、この戦いは。敵を倒すのではない。変質変貌させていく力を持っている。できれば、サタンまでももう一遍、天使に変えてやりたいわけだよな。しかし、

「聖霊に逆らう罪は赦されない」

とキリストは言われた。

「私をいくら悪口言ったっていいよ。けれども、私の中にあるところの神の霊に対して悪口言ったら、これはダメだよ」

と。悪霊は滅ぼされる。悔い改めないかぎり滅ぼされる。聖霊に逆らうところの罪はどうしても赦されない。私たちだって聖霊に逆らうこともあるでしょう。けれども、それは方程式的に、「それでは私は赦されないか」と、そんなことを心配する必要はない。

それは終末的な事態に、終末的現実を持った正に力ある存在となってこそ、さきほどの戦いが本当に楽しくできる。

「勝ち得てあまりあり」

とパウロがローマ書8章で言っているとおり。あのローマ書8章というのは聖霊の章といわれるところです。

「このイエス・キリストの愛から離すことができるものは、何ものがあるか」

とパウロが言っているのはそのことです。そういうわけで、このヨハネ伝第1章1節に私たちは無量なものを、無量な響きを感ずる次第であります。